

「法源寺山門修理はいつまで」

はじめに

曹洞宗松前山法源寺は、現在、福山城北側の寺町群中央部にあります。法源寺の縁起について、松前藩の歴史書で松前廣長が安永9年（1780）に記した『福山秘府』（寺院本末部巻之十三）によれば、文明元年（1469）の夏に若狭の禅僧「傳心隋芳」は、同郷の「武田信廣」が「夷島」にすることを聞き渡海し「於古斯利」（奥尻）に草庵（草葺の家）を結びました。その後奥尻の法源寺は、延徳2年（1490）に松前の「大館」に移され、「松前

山法源寺」と号し、松前家始祖「信廣」、2世「光廣」の菩提寺となります。さらに、慶長11年（1606）福山館が完成した後、大館にあった寺町は順次福山館に移転し、法源寺も元和3年（1617）から同5年（1619）にかけて現在地に移りました。元和年間に移転した伽藍（寺の施設）は慶安2年（1649）に類焼したとされています。また、法源寺の本堂及び庫裡は明治元年の箱館戦争で焼失しましたが、山門は残りました。

法源寺山門の特徴と年代
この山門は、棟に通じる2本の円形本柱の前後に4本の方角の袖柱を配すもので、「四脚門」と云います。門の格式としては最も位が高く、平安時代には限られた官職の屋敷の正門としてしか許されませんでした。

山門の屋根は切妻造りで、「こけら葺き」（厚さ3mm、長さ20〜40cm、幅9cmほどの薄い削り板で書いた屋根）です。屋根裏の垂木は「吹き寄せ」と云って、2本組と6本組の間隔を広く開けて配置する特殊なものです。また、正・背面の柱上に渡



写真1

された、彫刻で装飾された梁や桁の上に、「葦股」と呼ばれる装飾的部材が置かれています。これらに施された彫刻の様式から、東北地方北部の同時代、17世紀中頃以降の建立と考えられています。

現在の山門は昭和44年に修理工事が行われ、それまで瓦葺だったものを、創建当時の「こけら葺き」に葺き替えました。これ以降に修理は行っておらず、傷みが激しくなり、特に背面側は一部穴が開いたので、鉄板で応急処置をしましたが、その周辺の傷みも激しくなりました。この度、法源寺

のご理解をいただき、修理を実施する運びとなりました。

腐食の状況

修理のため山門背面の鉄板を剥ぐと、「こけら」はもちろん下地板までも腐食していました（写真1）。全体的には、正面側の腐食は相応（写真2）ですが、背面の妻側（写真3）と中央部の腐食が著しく、これは、杉葉の堆積や冬季の降雪や風などの影響が考えられます。今回の修理は、「こけら葺き」の全面葺き替えと、小破修理が行われます。



写真2

修理の主体と費用の負担

法源寺山門は、平成5年に国の重要文化財に指定されました。山門の所有者は松前山法源寺ですので、修理は所有者である法源寺が主体となつて行います。また、国指定文化財ですので、国が1/2を補助し、残りを道・町・所有者が負担し修理を行います。さらに、事務手続き等が複雑なので、文化庁の指導により、法源寺内に「法源寺山門修理委員会」を設けて、教育委員会職員が一部関わり、事務処理のお手伝いをします。なお、先月から修理工事が開始され、完了は12月を予定しています。



写真3